
全力少女と災難体质

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全力少女と災難体质

【NZコード】

N2331BA

【作者名】

アルト

【あらすじ】

「あなたの願いはなんですか？」

高校三年生の主人公朝宮悠希は夢に破れ傷ついた心を癒すために懐かしい故郷である御影町へと帰ってきた。しかし、とある一人の少女との出会いが災難に巻き込まれる原因となる。

少女の名前は咲山梨花。悠希が通うことになる御影高校ではその名を知らないものはいないとまで言われる天才にして天災、ついたあだ名が全力少女というまるで台風のような少女だった。

ひょんなことから悠希は梨花に付回されることになるのだが、次第にその距離を縮めていくことによつて彼女の秘密を知ることになる。

そして、彼女の秘密を知つた悠希はとある決断をする……

願いの叶う町、御影町を舞台に高校三年生の主人公が高校生活という小さな世界の中で苦悩し時には友人達と衝突しながらも必死に生きようとする再生ラブストーリー。

「あなたの願いはなんですか？」

願い、それは人が思うこうあって欲しいと思う事柄、変化、または願望。

人の願いなど、人の数だけあり、またその内容も千差万別だ。お金持ちになりたい、人より優れた人物になりたい、といったわかりやすい欲望ともとれるものや、昔別れた両親に会いたい、あの人との恋を実らせたい、などの叶いにくい願いなど様々だ。

ただ、この世界はそんな全ての願いが叶うようには出来ていない。叶う人は叶うし、叶わないものはいくら願っても叶わない。そんな理不尽な世界。

しかし、願いの叶つた人全てが幸せかというとそうでもなかつたりする。本当に理不尽な世界だ。

願いを叶えるためには、対価が必要になつてくる。もちろん、その願いが大きければ大きいほど必要な対価もそれに見合つた大きなものになる。

だが、対価を払つても叶わない願いもある。星の数ほどもあるのだ。それでも、人は願うことをやめようとは決してしない。願うことは人にとっては、生きるための希望でもあるのだ。

この世界は、とてもとても理不尽な世界、それでも人は願うことを見つめない。

…………願いの先にあるものを信じて。

「あなたの願いはなんですか？」

落ちゆく世界の中で彼が聞いたのはその声だった。妙な浮遊感と急激な重力、それらを一身に感じながら彼は屋上から飛び降りた。いや、飛び降りたというのは正しい表現ではない。

その証拠に、少年の胸元にはすでに氣を失っている少女の姿があった。彼は屋上から落ちた少女を助けるために共に屋上から飛び降りたのだ。

そんな中で聞こえた声、しかし、その声はすでに氣を失っている少女のものではない。

けれど、直接頭に響いてくる声、

なんだこんなときに?…と思いつつも声は再び頭の中に響いてくる。

「あなたの願いはなんですか?」

長い間空中に漂っているせいで、方向感覚までもがわからなくなつてくる。現実かそれとも幻かわからないがその姿は確かにそこにあつた。

「朝宮悠希、あなたの願いはなんですか?」

上下逆転した姿でその者は問づ。同じように落ちてこる。いや、そこだけ時間や空間といったものを切り取つたかのようにそれはそこにいる。それもその場に静止した状態のまま、

そのナニカが現れた瞬間、彼らの体は急激に浮遊感や重力を失い、その場にとどまるつとする。巨大な水あめの中に一人揃つて放り込まれたら身動きが出来ない、そんな感覚。

落ちていくことも這い上がることも出来ない。ただ唯一、許されるのはその場にとどまることだけ。それでも、体が自由に動かせるわけではなく、せいぜい、体の体勢を整えることぐらいしか出来なかつた。

彼らをわずかの間だけ生きることを許したその人間かも理解し難いナニカは若い女性の姿をしていた。その姿はどこかで見たような姿をしていたが、生憎と悠希にはそんな特定の女性というものはいない。しかし、妙に懐かしい、そんな気持ちにさせる不思議な魅力があつた。

自身が落下していることを忘れそうになる。切り取られた世界の中でも胸の中で氣を失っている少女は相変わらずの様子で目を閉じ

たまま開くことはない。

「あなたの願いはなんですか？」

なおもしつこく問う女性は、言葉とは反面に何故か悲しそうな表情を浮かべている。そんな彼女の言葉に悠希は考える素振りを見せるが、残念ながらこの状況でそんな余裕はない。

「僕の……、願い？」

「そう、あなたの願い」

呆けた様子で問い返す悠希に、田の前の彼女は悲しい顔を浮かべながらも彼に問う。

「思い出して、あなたがここにいる意味を」

「ここにいる意味？ どういうことだ？」

彼女は悠希の問いに答えず、ただ彼と胸の中で眠る少女だけを見据えていた。そんな彼女に悠希は何も言えずにいた。ここにいる意味？ そんなことを考えたことすらない。

ただ普通に生きて普通に死んでいく。僕の人生なんてそんなものだと思っていた。

そう、ただそれだけの話だつたはずだ。

彼はそれ以上何も求めない。しかし、彼女は悠希にここにいる意味を求める。

「僕は……、僕は……」

なぜここにいるのだろう、わからない。

そんな漠然とした思いが胸の中にこみ上げる。屋上から落ちて自身の人生などあとわずかという中でまさか自身の意味を問われるなど想像すらしなかった。何のために生きて何のために死んでいくのか、

「この世に生まれて十七年、そんなに長くは生きてはいないが世の中のことは少しあはわかるつもりではいる。それでも、この小さいはずの世界は彼にとっては大きすぎた。自分のことすら完全には理解してはいないのに、世界の全てをを知ろうとこつこつとが間違いなのだ。

「う…………、ん…………」

胸の中にいる少女がむずがるよつこ声を上げる。

「…………意味か…………」

少女を見ながらふと想ひへ。あつと僕のいる意味はこれなのだらう。もちろん、確証など無い。ただ、そう思つた。

彼女は悲しい顔から優しい微笑みに変わると血脉の意味を悟つた悠希を褒めるように言つた。その鈴のような響きを持つ声は悠希の心中にじつくじと染み込んでいく。まう、と悠希の中に温かい思いが溢れる。

「僕の意味」

「そう、それがあなたの意味、そして、あなたの願い

「僕の願い」

自身の意味を悟つた時、再び世界が動き出す。ゆつくじと確実に世界は動き出し、彼らは落ちてゆく。

胸に抱えた少女は相変わらず目を開けることはない。けれど、それはどこか安らかな眠りのよつこにさえ見える。

薄れゆく意識の中でなぜそう思つたのかは彼自身見当もつかない。少なくとも彼が助かりたいとか自身の身の安全を保障するものではなかつた。

なつた一言、

落ちてゆく世界の中で彼は答えた。

その声は誰かに届いたのかはわからない。少なくとも…………、彼女には届いたはずだ。

これでいいんだ……、これが僕のいる意味でこれが僕の願いだ。そんなことを思いながら、悠希の意識は遠退いていった。

「「ひ……ん……」

夢を見ていた。正直、どんな夢だつたかはあまり覚えていない。良い夢か悪い夢かと問われるならば間違いなく後者ではあるのだけれど、ただ、その夢の内容を深く吟味したならば意外にも良い夢なのかもしれない。

「まあ、どっちでもいいけどね」

そんなどうでもいい感想と、まだふわふわと浮いているような感覚に、頭を軽く振り目を覚まさうと意識を集中させる。蕩けそうになる眠気が恋しいが、いつまでも公共の場で寝顔をさらし続けるのもどうかと思い起きたことにした。

「ふう……今はどの辺りだろ?……」

体を動かすついでに、辺りを確認するように車内を見渡すが、残念ながらこの車内には僕一人しかいない。さすがにこんなところまで旅行に来る物好きはいないか。そんなことを思いながら大きく伸びをする。

うーん、と、伸びをしたときに思わず声が漏れるが、辺りを気にすることもなく思つ存分に体を伸ばす。変な体勢で寝ていたせいか節々が痛い。

長いこと電車に揺られ続けたせいで、いい加減座り心地も悪かつた。さすがに三時間も一人で話し相手もなく、座り続けているのもなかなか苦痛だった。そんなことを思いながら風に紛れて何処からか懐かしい潮風の匂いがする事に気づく。

「そういえば、海が近いんだっけ」

しみじみと懐かしい故郷の姿を思い出す。窓の外には青々とした海が広がっていて、小さく見える船が一つの点の様に海をのんびり走っていた。その風景は自分がいた故郷がもつすぐそこにあることを感じさせる。そんな風景を眺めていると、座り心地の悪いイスの

「ことなどはすっかり忘れてしまった。

「みんな元気にしてるかな」

一年間、連絡も取っていない友人の姿を思い浮かべる。シロは元気だらうか、カズはきっと美人になっているだらうな。きっと詩音も大きくなっているよな。そういうえば今年から高校生か。などと、ほんやりと考えながら外を眺める。

「あなたの願いは何ですか？」

頭の中で響く声にふと我にかえる。この町を出るときに聞いたあの声が再び聞こえた。

ガタン、ガタンと、聞こえる単調な電車の音。今、この車両には僕しか乗っていない。だから、僕に話しかけてくる人物も残念ながらいない。しかし、それでも聞こえる声。誰かが僕に問いかけるようなそんな声。その声は鈴のよつた響きを持ちながらもどこか寂しそうな音色を持つ声。

「僕の願い……」

願い。それは何なのだろう。この町を出るときははつきりとした目的は持っていた。でも、今はどうだらうか？ そんな漠然とした事を考えていると、駅員の単調なアナウンスが目的の場所を知らせた。

「次は御影町、御影町」

ようやく着いた故郷が見えてくると、先程の疑問はいつの間にか霧のよう霧散していた。

電車が完全に停車するのを待つて、誰もいないホームに降りる。当然ながら、この駅に降りる人間は僕しかいなかつた。

電車のドアが閉まる音と、閉まるその様が僕の夢へと続く扉に見え、それが完全に閉じてしまつたのを物語つて見えた。もう、終わつたんだ。これで、僕の夢は完全に潰えた。後ろを振り返らないつて決めたはずなのに、未だに引きずつている。そんな気持ちが嫌でこの場所に帰つてきたはずなのに……。

「もう……終わったことだ」

まるで自分に言い聞かせるように呟く。やつする」とで新しい自分と出会える気がしたから。

今まで、自分を運んでくれていた電車を見送り、誰もいない改札口へと目指す。向こうにいたときは自動改札が普通だったから、こんな誰もいない改札口というか無人の駅が無性に新鮮に見えた。

少し古びたポスターと時代とともに風化した駅。潮風の匂いと気持ちばかりの春の陽気が僕を迎えてくれた。

久しぶりに帰ってきた故郷の空気を思い切り肺に吸い込む。春の香りが体中に染み渡り、振り返ると青い海と少し冷たい風が心地よかつた。

「変わらないなあ」

故郷に帰ってきたの第一声がこれだ。もう少ししまともな感想があるだろうと、自分自身に苦笑する。でも、本当に感動した時などは声など出ないものだ。

海沿いの駅から見える町並みは僕が去ったあとあまり変わってはいないようだった。まだ咲くには少しばかり早い桜と、その合間に沿つて造られた家屋、そしてその場所に息づく人々。町は坂の傾斜に沿つて造られていて、春にこの街の展望台からこの町を見渡すと桜の絨毯と青々とした海が一望できる。御影町それがこの町の名前だ。

新しい学校の転入手続きの事もあったから、まだ春休みのこの時期に帰ってきた。反対する親を説得し、最後の一年くらいはやはり心許せる友人たちと過ごしたい、そんな思いを胸に抱きながら今ここにいる。

だが、目的はそれだけではない。僕にはもう一つ叶えたい願いがあつた。ただ、それは、どんなに願つても叶わないかもしれない願いだ。それでも僕は、一縷の望みを持ってこの町に帰ってきた。

「少し、考えすぎかな。僕のこの町での生活はまだ始まつてすらないんだし」

自身で思つた下らない不安を一蹴すると、目の前に見える町並み

に染まるように歩き出した。

昔と変わらないはずの町は少しづつ変化を見せていくようだつた。当然だ。僕も成長すれば町も変わつていく。それが当たり前の事のはずなのにひどく寂しく思えた。しかし、その中にあつても変わらないものがあることに気づく。小さい頃によく遊んだ公園や、小銭を握り締めて通つた古びた駄菓子屋、懐かしき母校、細い路地裏、そのすべてが僕がここにいた証に見え、自分の存在を証明しているかのように思える。

感傷に浸りたい思いに駆られたが、僕はそこまで人生を達観するほど長生きはしていない。まだまだ知らない事の方が多いし、これから変わつたり、作られたり、失くなつていく物の方が圧倒的に多い。だから、まだ感傷には浸つてなんかいられないのだ。

小さな頃歩いた桜並木を見上げながら、自分の足跡を辿る。今はここにいる。だから、今はそれだけでいい。

ふと、立ち止まつたそばから、海から吹く風に煽られ木々がなびく。まるで、僕の思いに反応しているような気分だ。

ゆつくりと目を閉じる。昔、描いた思いが僕の中に去来する。

あの子のはにかんだ笑顔、少し怒つたときに見せる頬を膨らませた子供っぽい表情、時々遠くを見つめてため息を漏らす寂しそうな表情、不意に見せる大人っぽい表情、そのどれも忘れたことは一度だつてない。

あの子の顔を思い出して、懐かしい記憶に触れ自然と笑みがこぼれる。

「……僕は君に伝えるために戻つてきたんだ」

そんなことを口にした直後だつた。

ビキンッと、体に電流を流されたような痛みが走る。

「な、なんで！？」

気のせいだ。本当はそう思いたかつたが、体は正直なようで心臓がドクン、ドクン、と激しく脈打つのがわかる。閉じていた目を開け周りを確認するが、残念ながら何もない。

やはり、気のせいいか？ そう思い首を傾げながら歩く。いつするが、その場から歩くことが出来ない。

「何があるのか？」

自分に言い聞かせるように呟く。当然ながら、その問いに答えてくれる者などいない。

体中の感覚が鋭敏になつていて。体がこの反応を示すときは大抵、ろくなことには遭わない。最初はこの反応に戸惑いもしたが、さすがに慣れた。むしろ、この体のおかげでここにいることが出来ていると言つても過言ではない。

なんだ、一体何が起きる？

そんな不安とある種の期待の入り混じつた感想を抱きつつ、その事態を静観する。

ふいに視線を感じ慌ててその方へと向き直る。ふわりと、黒髪を風になびかせながら一人の少女がこちらを見ていた。

「君は……」

まさか、そんなはずは……。

動悸がさらに増していくのがわかる。体の体温がそれに呼応するよに高まつていく。

あの長く艶めく黒髪、二つの大きな双眸、雪のよつに白い肌、触れれば途端に壊れてしまいそうな華奢な体、そのいづれもが先ほど僕が思い描いていたあの子と同じ姿形をしてそこに立っていた。一刻も早く駆け出したい。君の顔をもつと見たい。向かい合つて君の声を聞きたい。

思い描いた夢と現実が重なつていく。

どれだけこの時を望んだか。

どれだけ君の事を考えていたか。

どれだけ……どれだけの思いを募らせて、叶わないと思っていた。

だけど、君はそこにいる。だから僕は君に会いに戻ってきた。

動け、動け、強く、強く、

そんな思いと共に、より強く動けと念じる。

一步踏み出す。やつとパドックから開放された競走馬のよつ」

田散に少女へと駆け寄る。

会えた、やつと会えた。一年間もずっとこの時を待ち望んでいた。予想以上に早い願いの成就に、少しの戸惑いを覚えつつも僕の心は最高に高まっていた。

しかし、対する少女の態度は僕の予想したものとは違い、とても冷ややかなものだった。

こちらに向かってくる変質者を見るような田で顔を歪めると、僕と同じ方向を向いて走り出した。

「ちよ、ちよっと待って……」

慌てて声をかけるが少女は一田散に逃げる。僕は逃げる少女にさらに加速度をつけて走る。側から見れば、完全に変質者が少女を追い掛け回している構図になつていて、今の僕にそこまで考えている余裕などない。

一年間ずっと思つてきた願いが今、叶おうとしている。それだけで頭の中は一杯だった。

それにも逃げる少女の足の速いこと速いこと。男子高校生であるはずの僕が追いすがるのに必死になつていて。手を伸ばせば届く距離にあるのに、また……僕の思いは届かないのか……。

いや、届く！だから手を伸ばせ！ 握め！ 僕は君に伝えたいことがたくさんあるんだ。心の中でもう一人の自分が叫ぶ。けれども田の前を走る少女はそんな僕の心中とは正反対の反応で「あんた何なの！？ なんで私を追いかけてくるの！？」必死になつて逃げ惑つていた。

「僕は君に会いに来たんだ！ ずっとずつと会いたかった！！」

自分でも明らかに変質者のような口ぶりでなにやらとんでもないことを口走つている気もしないではないが、それ以上に彼女を求める思いが上回つていた。ずっと走り回つてているせいで、息が上がりてくる。呼吸に空気がかかれる音が混じりだす。現役でいたときはもう少し走り回つてもこの程度問題なかつたのだが、やはり時の流

れは恐ろしい。格段に体力が落ちているみたいだつた。

少女はなおもペースを落とすことなく走つていたが、それでも、やはり僕のほうに分があった。

必死の体で彼女に追いつくと、全力で振り続けていたその手を掴む。

「ちよつと待つてくれ！！ 僕は君に話が

「何すんのよ！ 離せ、この変つ態つ！」

見た目どおり華奢な感触が伝わつてくるが、この体のどこにそんな力があるのだろうか少女はそう言つて掴まれていないほつて腕で僕を掴み返すと、勢いもそのままに宙へと放り投げる。

突然の状況に頭が追いついていかない。

グラリ、ふわり、ドスンッ！ アクシデント三段活用な感じできれいに地面へと叩きつけられる。

一体、何が起つた？ 状況を推測しようにも頭が回らない。地面に体を打ちつけた衝撃と痛みの方が強く、考えようとする強制的に排除する。

「か…………は…………」

漏れ出そうとする空気を押さえ込むとするが、衝撃に対するダメージのほうが大きくそれを許さない。体が不気味に痙攣するのがわかる。自分が投げ飛ばされたのだと気づくには時間がかかった。それ程までに僕のダメージは深刻だつた。

「く…………があ…………な、なんで…………」

「な、なんなのよ…………あんた…………」

なんなのだとはこつちが言いたい。もしかして覚えていないのか

？ 僕の中にそんな不安がよぎる。踵を返すように少女は僕に背を向ける。その姿を見て僕は必死に引き止めようとするが、激しく体を打ちつけた衝撃のせいで言葉が出ない。

「ま、待つて…………くれ、僕は…………」

からうじて残つていた空気を総動員してかすれた声を吐き出す。

やつと…………やつと…………会えたのに。また叶わないのか？ 僕の願

いは……。

遠退く意識と戦いながら彼女をその場に留めようとするが、その声が届くはずもなく、少女はその場から立ち去り、僕は一人春の陽気の中、地面に這いつくばりながら意識を失った。

懐かしき友人達との再会

「……キ……ユキ」

誰だろ？、僕の名前を呼ぶ声がする。懐かしい、どこかで聞いた声だ。

「ユキ……ユキ！」

でも、もういいんだ。疲れたよ……少しだけ寝かせてくれ。やつぱり僕の願いは叶わないんだ。

諦めにも似た思いが僕の中に沸きあがり、全てのことから目を遠ざけようとする。けれど、僕を呼ぶ声はそれを許してはくれない。相変わらず声は僕を呼び続けて止むことは無い。

聞こえているのに聞こえない振りをしてその声が聞こえなくなるのを待つ。しかし、その声が止む事は決してなくそれビニウムか……、

「……ユキ、起きろ！」

その優しく響いていた声は、唐突に怒声へと変化した。その突然の変化に思わずビクリと竦んでしまう。気づけば太陽は僕の真上にその顔を覗かせていた。

「あ……」

ぼんやりと目に映つたものを見て僕は拍子抜けしたというべきか、なかなかにして情けない声を出していた。

「……一体、君はここで何をしているのだ？」

声の主は半ば呆れたような口調で僕に話す。一瞬、誰か判断がつかなかつたが、この独特の口調を聞けば懐かしい思い出とともに、全てが思い出された。

「カズ……カズなのか？」

「……正直、こんな道の端で寝ているような者を友人と呼ぶべきかは判断がつかぬが、紛れもなく朝宮悠希、君の友人だ」

カズは少しの溜め息と、苦笑いを織り交ぜたなんとも形容しがたい表情で僕の名を呼んだ。

一年振りに会つた友人は、僕の知つてゐる友人とは少し変わり、ずいぶんと大人びた印象に変わつてゐた。彼女の名は柊一葉、愛称はカズ、彼女の名前が一葉だからカズというわけだ。もともと、武道を嗜んでいるせいか凜とした雰囲気を纏つてゐるカズだが、その雰囲気は今も変わってなくて頭の上で結い上げた髪がより一層その姿を際立せている。例えるならば日本美人、大和撫子とは彼女のような女性のこと指すのだろう。ちなみに僕は悠希ゆうきだからユキと呼ばれている。

「カズ、久しぶりだね」

「……ああ、確かに久しぶりだな。しかし再開するにしてももう少し場所は考えて欲しかつたものだな。まさか、一年ぶりに友人に再会したと思ったらその友人が道端で倒れているところに遭遇するなんてな。お爺様が懐かしい風が吹いたと言うから、きっと君だろうと見に来たのだがこんな所で何をやつてゐるのだ？ 昼寝をするにしても、もう少し場所を選ぶべきだと思うぞ」

「昼寝じゃないんだけど……まあ……色々と事情があつてね」

その言葉に僕は言い返すことなどとも出来なかつた。知り合いだと思って人違ひな少女を追い掛け回した末に、あつさりと投げ飛ばされて、氣を失つていたなどと、笑い話でも避けたいところだ。言葉を濁す僕になにか察するところがあつたのか、カズはそれ以上詮索することなく話題を切り替えることにしたようだつた。

「こんな所でもなんだ、少し歩くか？」

スッと手を差し出すカズはにこやかに笑いながら言つた。僕はカズに手を引かれ立ち上がると、体中についた埃を払う。そして傍らに置いたままにした、もとい、落ちていたカバンを掘みその場を後にした。

御影町の中腹にある桜並木を一人並んで歩く。桜並木といつてもまだ桜の咲いていないこの時期ではそれを感じるには少し時を待たなければならぬようだつた。

「しかし、いつ戻つたのだ？ まさかあんなところで行き倒れてい

るから最初は驚きと焦りを感じたぞ」

「……それはもう言わないでよ。実はついさっき戻ってきたんだ」「まったく、君はこの町を離れるときもそうだったが、何でも突然すがるぞ。あの時私たちがどれほど心配したか、一年も連絡をよこさず……」

カズはそこまで言つて黙り込んでしまつた。僕は自分の事ばかり考えて行動してきたが、みんながこんなにも僕のことを心配してくれたことが何よりも嬉しかつた。

「ごめん。でも、もうどこにも行かないから」

「そうか、ならばいいのだ。それはそうと、君の話していた目的とやらは無事果たせたのだな。でないと君がここにいる理由にはならないからな」

「……」

「どうしたのだ？」

即答しない僕にカズが不安そうな顔を浮かべてこちらを見ている。

「……夢は……失つた」

「……すまない、辛いことを聞いてしまつた」

「謝らなくてもいいよ。別にカズが気にするようなことじやないし、ただ単に僕の力不足だつただけなんだからさ。それに夢はいくらでも見られる。叶わないことに対する考え方でいるよりもまた別の目的を持つた方がはるかに理想的だよ」

「……君はそれでいいのか？」

「それでも構わない。そう決めたからこの町に帰ってきたんだ」

本当は嘘だ。そんなことを思つてなんかいない。そんな風に割り切れるほど僕は大人ではないし、ずっと叶えたい願いだつた。中途半端な気持ちでやつてきたわけではないことも十分にわかつていて。それでも、叶わない。この世界はやつぱり理不尽に出来ていて。

僕の言葉にカズは納得のいかない顔を浮かべていたが「君がそう言つならば私もそれ以上は何も言わないでおこう」と、呟いてにこやかな表情をこちらに向けた。

「さて、漫つぽい話はここまでにしよう。君はこれからどうするのだ？」

「そうだね。実はこれから一人のところに挨拶に行こうかと思つてたから、カズの予定さえよければシロの所に行こうかと思つてるんだけどどうかな？」

「ふむ、それならば都合がいい。私もあるバカに用があつたのだ」「はは、その様子だとシロは相変わらずなんだね」

「ああ、相変わらずだ」

そう一人してまだ見ぬ友人の事を笑いあつた。氣づけば、先ほどまでの重たい雰囲気はなくなつていた。

僕等が歩いていた桜並木の道をさらに展望台のほうへ向かつて歩いていく。この辺りまで来ると住宅地といつこともあつてか色々な形の家が立ち並んでいた。

「ここは、少し変わつたみたいだね。知らない家が増えている」

「最近はこういった場所に住むのが流行りなのかはわからんが、やたらと家が立ち並ぶようになつてな。昔よりは幾分、華やかになつた氣がする」

久々に通る町並みの変化を楽しみながら一人で歩く。こうして歩くと今までには気づきにくかつた変化が顕著に感じられる。もちろん、自分が幼かつたせいもあつたのだがやはり一年という月日は僕が感慨にふけるには十分な時間だつたらしい。

そういうた見知らぬ家が立ち並ぶ中、それはあつた。

「それでもここだけは、変わらずに僕を迎えてくれるんだね」

「そうだな。ここだけだ。昔となんら変わらぬ場所というのは」

そう一人して思う場所それは現代風の家が立ち並ぶ中、その家だけが童話の世界に出てきそうなレンガ造りの家だつた。実際に使うのかどうかはわからないが、煙突までついている。周りの家との協調性を持たない一風変わつた家だつた。

横にいたカズが、馴れた手つきでその家の呼び鈴を鳴らす。すると、家の中から「はーい」という声が聞こえ扉が開く。そして、そ

の家の家主は僕とカズの顔を見てとても驚いた声をあげた。

「あれ、一葉さん、と……ゆ、悠希さん！？」

「久しぶり、詩音」

「お兄ちゃん！ 悠希さん！ 悠希さんだよ！」

詩音と呼ばれた少女は、僕の姿を認めるともう一人の家主の下へと走つていった。彼女が家の奥に入つていつて数秒後……ドタドタと、騒がしい物音を立てながらもう一人の家主が顔を現した。

「ユキ、ユキなのか！？」

「久しぶり、シロ」

「うああおい！ ユキー！」

久々の再開がよほどうれしいのか、助走をつけてこちらへと走つていくる。その瞬間、嫌な予感を感じた。

走つてくるシロ。それを見つめる詩音。ぎょっとするカズ。そして、なにがあつても対処できるようにと身構える僕。

「ユキー、ひーーさあーしいーぶうーりいーだあああー！」

助走をつけた勢いのまま、こちらに向かってダイビングしてくるシロ。もちろん、これも予想通りだ。

世界全体がゆっくりと動くような感触に陥り、飛び込んでくるシロを見つめながらにやりと笑つてみせる。

「甘いよ、シロ」

瞬時に判断して僕はそれをかわす。しかし、僕の背後には……、

「な、カズ！」

「え、カズ！？」

カズの存在までは計算に入れていなかつた。シロが僕の背後にあるカズに気づく。カズも急に目の前に現れた変態を認識するが、対処する暇もなく、そのままなだれ込むようにシロとカズは地面へと倒れこんだ。

「きや

「！」と、多分、僕の十七年間の人生でもそういう聞いたことのないカズの悲鳴が閑静な住宅街に響く。傍から見れば痴漢の現行犯に立ち会つた風にさえ見えただろう。

19

「い、痛てて、なんだ？」

「つておう！」

シロが倒れた姿勢のまま、状況を把握する。飛び込んだ先はカズのふくよかというべきか、地面に倒れこんでもなお、その形をはつきりとさせている胸に顔をうずめる形になっていた。

人間工アバッグ……。

ふと、そんな感想が脳裏をよぎるが、この状況でそんなことを口にしようものならシロに引き続き第一の犠牲者決定だろう。この後のことを考えるとシロに対してはお別れの挨拶を告げないといけないのだろうが、この世から旅立つ前にこの世の春を見たんだ。これでイーブンだろう。……それにしても羨ましい。

シロは頭をさすりながらゆっくりと起き上がり、その場から逃れようとする。もちろん、顔面蒼白。次に何が起こるかなんて想像するだけでも恐ろしい。もちろん、事態の張本人であるシロがそれを良く理解しているからこそ逃げようとしているわけなのだが。

「……そ、そーいや、俺宿題やんなきや……」

「……待て」

その声は地の底から響くような重厚な響きを持ち、その場に居たものを一瞬にして凍り付かせるには十分な重さがあった。むくりと緩慢な動作で立ち上がったカズは、特に何かをするわけでもなくただ一点のみを見つめている。蛇に睨まれた蛙の心境のシロはその場から一步も動けずにいた。傍目から見ていた僕と詩音も、これから起きるであろう凄惨な結末を目にしないといけないと思つと、非常に心苦しかった。

「……貴様、どこへ行こうとこいつのだ？」

「い、いや、その……そつだ事故だ。そう、あれは事故！ 不幸な

偶然が招いた結果だ！」

「そつか、あれは事故なのか。ならば仕方無いな」

「し、仕方ない、仕方ないよな……は、ははは……」

シロは自分の言い訳が通用したと思っているのに、顔を引きつらせながらもゆっくりと後ずさりをやめようとほしない。そんな不審

な動きを見せるシロにカズが咳く。

「……貴様、どこへ行こうといつのだ？」

「ど、どこも行かね よ。ほ、ほり互いの誤解も解けたし、ここに
いてもなんだからよ、中に入ろうぜ」

シロはそう言いながらもいつでも全力で逃げられるように体勢を
整えている。その次の瞬間、カズがにっこりと笑った。何故だろ。う。
その笑顔がとてもなく怖い。そう、例えるならば終焉といつ慈悲
を与えるとする菩薩のような笑顔だった。

「……詩音、僕たちは先に中に入つていよう」

「え？ あ、そうですね。出来ればお兄ちゃんの最期を見ておきた
かつたんですけど」

「やめておいたほうがいいと思う。色んな意味でもね」

「詩音！？ 今さらつと懲らし」とを口にしたよな？ 僕の最期
がどうとか……」

「気のせいだよ」

僕は凄惨な光景を目にする前に、詩音を家の中に入れる。教育上
問題になりそうなシーンだし。

「一葉さん、先に入つて待つてますね」

「ああ、そうしてくれ。さて、と、いつまでも客人を外に出したま
まというのも悪いだろ。うからせつと済ませるか」

「な、何を済ませるつて？」

自分の身に明らかな危険を感じ取ったシロは、スタート直前のランナーの如く身を屈めて逃げようとする。しかし、カズのほうが早
かつた。それらを機敏に感じ取ったカズはシロの前に先回りすると、
首元を掴み自らの眼前に顔を引き寄せた。シロは引きつった顔のま
ま口を金魚のようにパクパクさせている。それでも、状況から見れ
ば金魚というよりも、俎上の鯉といったほうがしっくりくる。

シロ、来世でまた会おうね。心の中で次の再開を願いながら手を
合わせる。

「事故でも責任は取らないとな」

「ひ、ひいいいい！」

「へぶらあーー！」

それが僕たちの聞いたシロの最期の声だった。

一波乱あつたものの、一応に落ち着く。まあ、何名かを除けばだが……。

カズはシロに抱きつかれたことがよほど効いたのか、先ほどからなにやらぶつぶつと言つてはいるし、対するシロは気にした風でもないがカズに思い切り殴られたせいで顔の半分が異様に腫れ上がつていた。残つた詩音は、やれやれといった風に溜息をつきそうな表情で自分の兄を見る。色々と妙な感じになつてはいるが、僕が過ごした日々が戻ってきたような気がして嬉しく思った。この二年間、色々とあつたけれどやつと自分の居場所に戻れた。そんな感触。

「今、何か持つてきますね」

詩音は客人である僕らに気を使いキッチンへと向かつた。「バカな兄とは違いよく出来た妹だ」とはカズの意見だ。実の親友にそういうのはいかがなものだろうとは多少なりとも思つたが、こればかりは事実なのだから否定の仕様がなかつた。

彼らの名は織田士郎おだ しろうと詩音しづねといふ。

士郎ことシロとは僕と同い年でカズとも小さい頃からの幼馴染だ。外見はとても社交的な好青年といった印象があるがそれは外見だけの話でいつもくだらないことやつてはカズに怒られていた。対して妹の詩音は人見知りをしそうな印象があるが、それは外見だけで兄に似てとても人懐っこい。そしてどういうわけかシロより出来がいい。容姿だとかそういう外見的なものではなく内面の方だ。彼らをよく知る者たちは妹にいいところを全て吸収されたのだろうと口を揃えて言つたが、詩音は「お兄ちゃんは普段ふざけてばかりですけど、本当はすごく優しいんですよ」と言つていたつて。もちろん、それは僕だってカズも理解している。しかし、普段の言動のせいでそれが理解されにくいのはとても残念な気もする。

さて、その残念な言動の兄はとてうど、

「いや、コキ久しふりだな。」うして話すのは一年振りになるんだな。元気そ�でよかつた

「シロこそ相変わらずだね。変わつてない」

「そりか？俺は大人の男になるべく、日夜特訓の日々をだな……

「また、そんなことばかり言つて。じつそ、たいしたものではないですが」

シロが意氣揚々と自分の恥をさらす前に妹としてそれを止める。詩音の気苦労もどうやら相変わらずのようだ。

「それで、一年ぶりに帰つてきたつて事はこの町に戻つてくるのか？」

「うん、またこの町に住むことになつたからそれで挨拶にと思つてね」

「そつか。ユキ、お前のいないこの町は寂しかつたからな。またあの時のように遊べると思つと俺はうれしいぞ」

そう言つて立ち上がると、再びこちらに飛び込んでくるのを寸前で制す。横ではカズがびくりと跳ねる。よほどトラウマになつたようだ。

「じほん、……まあそれに関しては私も同感だな」

平静を取り戻したカズがうんうんとうなずきながら同意する。その光景を見ながらなぜか詩音がうれしそうに話す。

「お兄ちゃんいつも悠希さんの話ばかりしていましたからね。だから、先ほどの言動もどうか大目に見てあげてください」

「おう、大目にみてやつてくれ」

僕とカズはつづくシロの妹が詩音でよかつたと思つた。じゃなかつたらきっと後ろから刺しているかもしれないからだ。もちろん、それは冗談だけど。何にせよ、みんなは僕の帰りを待ち望んでいたことはよくわかつた。それだけでも僕にとつては、帰つてきてよかつたと十分に思える。そんな気がした。

一年間は言葉にしてみると長いように感じる。けれども、それを話に置き換えると以外にもそう長くは感じなかつた。むしろ、短く

感じるぐらいにさえ思える。

話の度にユキは変わつていないと日々に言われる。僕にしてみれば、三人とも僕のよく知つてゐるままだと思つ。もちろん、変わつたこともあるだらうが、それはささいな変化なのかもしれない。これから変わつていくんだ。色々と……。

昔話も一区切りついたところで僕はこの町に帰つてきてからずつと氣になつていてことを二人に話してみることにした。

「そりいえば、聞きたかった事があるんだけどいいかな？」

「おう、なんだ？ カズのスリーサイズなら上から9 ぶじゅう

！」

「ゴスッ、とかなり鈍い音をたて、シロがうずくまる。カズは鬼のよつた形相でシロのみぞおちに一撃を食らわせたようだ。それにしても、一瞬だけ9と聞こえたがそうなるとカズはなかなかのスタイルの持ち主なのか？ という僕の意見はとりあえず置いておこう。横では詩音が自分の胸元に手をあてて「9……」と、繰り返し呟いていた。詩音のダメージも兄同様深そうだった。

「はあ、はあ……それで何が聞きたいのだ？」

シロは未だ真つ白になつたまま動こうとはしなかつた。完全にクリティカルヒットだつたからしばらくは動けないだろ。ただ、時折「お花畠が……天使が……」と呟きながらビクビク動いているのがとても気持ち悪い。

視界の端に移るびくびくと痙攣をする物体を、華麗に無視することにして話を続ける。

「あ、うん、大したことじやないんだけど、あの展望台の近くにあつた白い屋敷つて今でも残つてゐるのかな？」

「君もなかなか妙なものを気にするのだな。あの屋敷のことは君に言われなかつたら思い出すこともなかつた。もはや、当たり前のようにあるはずなのに」

「確かに、カズの言つとおりだな。俺もあの辺りはよく行くけどあんまり気にしたことはなかつたけど、あつたなそんのも」

「そつ、か、まだあるんだね。というか、生きてたんだね」

カズといつの間にか復活していたシロが口々に話す。シロは僕の言葉に「人殺し！」と反論したが完全に無視する。この町の人間にとつてはあまり興味の持つようなものではないのかもしれないが、

僕にとつてはこの町に戻ってきた目的がその屋敷なのだ。

しかし、あの屋敷はすでに人が住んではないし、この町の人間でさえあまり思い出すことのない忘れられた場所のはずだ。だが、どうしてそんな場所を？」

カズが不思議な顔をしながら僕に尋ねてくる。それにはカズだけではなく、シロや詩音までもが興味をもつていていたようだつた。

「うん、ちょっとね」

「なんだよ、隠し事か。水くせーな、話してみるよ

「隠し事つてわけじやないんだけど……ね」

「お兄ちゃん、無理に聞いたら悪いよ」

デリカシーに欠ける兄を詩音が嗜める。詩音の気遣いは嬉しかつたが、別に隠し事というわけではない。ただ、少し話しにくい話だから言いよどんでしまつただけなのだが、……どうやら、二人は僕のこと忘れ普通の兄妹喧嘩に発展してしまつた。やれやれ、これは話そうにも話せなくなつてしまつた。そんな、当たり前だつた光景を眺めながら僕は懐かしい情景を思い浮かべる。あの少女と出会つたあの時を……。

僕があの少女と出会つたのは、中学三年生の秋だつた。まだ、夢はきつと叶うと信じて前だけを見ていた頃の話だ。

いつものように部活を終えて家に帰る途中に、あの少女と出会つたのだ。あの時のことは今でも覚えている。忘れるはずもない。

当時、僕の住んでいた家はシロやカズの家とは逆の方向で、この町にある展望台を上つて少し降りた場所にある住宅地の一画に住んでいた。両親はいつも家にはおらず、家族そろつてご飯を食べることはあまりなかつた。僕自身も夢のために奮闘していた時期ではあ

つたから、両親の仕事のことがなくても自然とそうなつていたに違いない。

学校が終わり家に帰るときには必ず展望台を通り、僕は毎日見ることが出来る展望台の風景がとても好きだった。朝方の町が起きだす風景や、夕日に照らされオレンジ色に染まる御影町を見るのがいつも日課になっていた。

ただ、その日だけは少し違っていた。

いつものように夕日に染まる御影町を見て家路に着く僕の目の前を何かが通り過ぎていった。

「……紙飛行機？」

ふわり、ふわりとその紙飛行機は空中を優雅に飛んでいた。もし、この場所が水の中ならば優雅に泳ぐ魚をイメージしていた。

「なんで、紙飛行機が」

目の前に落ちてきた紙飛行機を拾う。何の変哲もないただの紙飛行機、ただ、それは一機だけではないようだった。

「あ、また」

僕が持つている紙飛行機だけではなく、また別の一機が空を飛んでいる。よく見れば、近くの木にも一機引っかかっている。

いつたい誰が？

その紙飛行機が飛んできた方向を見るとどうやら住宅地の方から飛んできているのが見えた。そのときの僕は、なぜかこの紙飛行機を飛ばしている人物に無性に会いたくなつた。理由などない。ただ、なんとなくだ。

住宅地に向かつて歩いていると、また新たな紙飛行機が空を飛んでいた。気がつけば僕は駆け出していた。

少し、息を切らせながら紙飛行機が飛ばされている場所にたどり着く。そこは、僕の家の近くにある大きな白い屋敷だつた。

その屋敷の一階の窓が開かれていて、そこから、紙飛行機は飛ばされていた。ふと窓のほうを見る。窓には色の白い少女が立つていた。少女は、ただただ窓の外をじっと眺め、そして紙飛行機を飛

ばしていた。しかし、紙飛行機を飛ばしている少女の顔は楽しそう

とか、そんな雰囲気ではなく、憂いに満ちた表情を浮かべていた。

じつと見ている視線に気がついたのか、少女が僕に気づいた様子でこちらに向き直る。そして、窓から姿を消した。というよりも、家中に入つていつてしまつた。僕が不審者に見えたのだろうか、確かに、じつと見ていれば誰でもそう思うか。

そつとその場を後にしようとしたとき、「待つて」と声をかけられる。声の方向へと振り向くと、先ほどの少女が屋敷の玄関に立つていた。

少女は手に紙飛行機を持ったまま、僕の方に近寄つてそして、「それ」と言つて僕の方を指差した。

「えつ？」

思わずきょとんとしてしまつた。状況がわからない。少女は何に対して指差したのだろう。指差すほうを見てみると、僕の手の中には、先ほどの紙飛行機が握られていた。気づかぬうちに持つてしまつたようだ。

「これ？」

僕が持つていた紙飛行機を見せると、少女はこくんとうなずいた。よっぽど大事な何かなのかもしないと思ったが、よくよく考えてみれば大事な何かならば飛ばすことはないんじやないか?と言つ結論に至る。

「これは君が飛ばしていたの?」

「……」

少女は何も言わない。ただ、こちらをじつと見つめていた。

よく見れば、少女はとても美しい顔立ちをしていた。肌は陶磁器のようく白く、長く伸ばされた髪はとても艶やかな黒髪だ。こちらを見つめる双眸は大きくそれでいて何か惹きつけられる印象を持った。

一言でいうなれば、人形のような少女。

しかし、美しい顔立ちなのだが、なぜかその表情は悲しそうに見

える。僕にとつては、なぜ、そんな悲しそうな表情を浮かべているかの方が気になつた。

僕は手に持つていた紙飛行機を見つめながら少女に尋ねる。

「これは君のだよね？」

もう一度問い合わせると、少女はうなずいてくれた。そして、こう言つた。

「願い」

「願い？」

「そう、それは私の願い」

少女が何を言つているのか正直、理解できなかつた。すると、少女は不思議そうな顔をしている僕に持つていた紙飛行機を見せた。ただし、紙飛行機になる前の状態でだ。

「なるほど、そういうことか」

僕は思わずくすりと笑つてしまつた。すると、少女は少しむつとしたような表情を浮かべる。へえ、そんな顔も出来るじゃないか。内心、ずっと無表情でありながらもどこか悲しそうな顔をしているのが気になつていてから、違う一面を見れた事が嬉しく思えた。

紙飛行機の中にはこう書いてあつた。

“元気になつて自由に外を歩いてみたい”

少女の文字らしく綺麗な筆跡だつた。その彼女の願いには強い想いとその願いが成就しにくいものであることがなんとなくだがわかつた気がした。僕自身にも叶えたい願いがあるから。だけど、それを叶えるために彼女はあとどれくらいの対価を支払わなければならないのだろうか。

「でも、なんで紙飛行機なんかに？」

「紙飛行機に書いて飛ばして、もし、それがあの海まで届いたら私の願いが叶う気がしたから」

二人揃つて高台から見える海を見る。

海を見る少女の横顔は先ほどまでの弱々しい表情とは打つて変わって、強い意志を秘めた顔つきをしていた。普通に考えたならばそ

んなことは不可能に近い。けれども、もし、風が吹いてその風に乗つて海まで届いたら？

もちろん、そんなのは本当に奇跡に近い。しかし、本当に奇跡といつものがあるならば……。だから、僕が彼女に対し言つ言葉は決まつていた。

「きつと叶うよ

「え？」

「大丈夫、きつと叶うから」

「……」

僕の言葉に少女は信じられないといった顔をしていた。そんな彼女に僕はにこりと笑つた。彼女もそんな僕の表情を見てにこりと笑つた。その顔はとても輝いていて素直に綺麗だと感じた。

「あなたがそういうならばきつと叶う気がする。ううん……きつと叶う。きつと」

そして少女は手に持つていた紙飛行機をそつと抱きしめる。心地よい風が僕たちをやさしく包み、そこには一つの笑顔があつた。海が近いせいで少し潮の香りがした。

その日から僕は、彼女の話し相手になつた。彼女は生まれつき体が弱く、いつも家にいることが多いらしい。そのため、一人で外出歩くこともなかなか出来ないため、僕がいつも屋敷に訊ねてくれることをとても楽しみしてくれた。

自分の夢や学校であつた出来事、少女は僕の話を聞くたびに、色々な表情を見せた。満面の笑みで笑つたり、信じられないといった表情で驚いたり、感情が豊かなんだな、と少女に話すと彼女の答えはそんなものではなかつた。

「私は小さな頃から学校に行けなかつたから、あなたの話は聞いていてとても楽しい」

そう言つて少女は笑つたが、僕は少女に言つたことを少し後悔していた。軽率だつた。こんなことぐらい少し考えれば気づきうことなのに。そんな僕の顔を見て考へていることを察したのか、少

女は諭すように言った。

「気にしなくていい。私はあなたが今、ここにいてくれるだけで笑顔になれるから」

そう言つた少女の顔をまともに見れなかつた。少女は大して氣にしていない様子だつた事が余計に恥ずかしく思えた。情けない、一人で何を考えているのやら。そんな、甘い考えを無理やりに押さえ込み、僕と少女の時間は過ぎていつた。

そんなるある日、いつものように屋敷を訪ねると、少女は一つの提案をしてきた。

「あなたにお願いがある」「お願い？」

僕の言葉に少女は何も答えなかつた。代わりに「ついてきて欲しい」という言葉が返つてきた。

お互に何も言葉を交わさず、ただただ歩く。僕は手を引かれるままについていくと、そこは御影町の展望台だつた。

夕日が僕らを照らし、一人の影を長く伸ばす。その場所だけがくつきりと切り取られたかのように、しん、と静まり一切の物音がしなくなる。

辺りには僕たちしかおらず、一切の人影すら見当たらない。

「なんでここに？」

僕の質問に、じつと町のほうを見ていた少女がこちらに振り返る。逆光に照らされた少女はとても輝いて見えた。

振り返りこちらに笑いかける少女、長い髪がそよそよと流れ、その髪をかきあげる。その姿がとても美しく見え、僕の鼓動が高まる。まるで映画のヒロインみたいだと思った。映画のワンシーンでエンドティングも間近のラストシーン。舞台には僕と彼女の一人だけ。そうして彼女はゆっくりと近づきこつ言つた。

「私たちの思い出をここに埋めよう」と。

本当に映画のワンシーンみたいだ。実際にそれを体験しているの

だが、現実感がない。

少女は手に持っていた鞄から小さな箱を取り出し僕に見せた。とても凝ったデザインが特徴の箱だった。いや、それは箱というよりはオルゴールのように見えた。

「これは？」

「タイムカプセル」

「タイムカプセル？」

「そう、このタイムカプセルを埋める」

「でも、埋めるつてどこに」

少女は少し思案した顔を浮かべる。そして思いついたらしく「ここに埋めよう」と言つて展望台にある、一本の桜の木の下を指差した。

展望台には大きな桜の木が立つていて、少女はその桜の木の根元にタイムカプセルを埋めようと言つた。確かにここならば忘れることはないだろうし、何かの拍子に取り出せなくなることもないだろう。

そうと決まればあとは穴を掘るだけだ。少女ははもともと埋めるつもりで来たのかシャベルなどを持つていてとても準備がいい。

二人そろつて黙々と穴を掘る。まだ初秋といつこともあり、穴を掘つていれば自然と汗が出てくる。でも、今はそんなことよりも彼女との思い出を一つでも多く作ることしか考えられなかつた。

「私、小さな頃から夢だった。こうして、誰かと歩くこと。色々話をしたり夢を語ること。そして、こうやってたくさん思い出を作ること」

少女は穴を掘りながら、自身の思いを語る。

「でも、なんでタイムカプセルを？」

やつとの事で箱を埋められるぐらいの大きな穴を掘つた。箱を埋めようかといふことここで僕はずつと疑問に感じていたことを口にする。

「あなたの願いと、私の願いをここに埋める。そしていつかその願

いが叶つたらその時にこれを掘り出す

「なるほど、そのためのタイムカプセルか」

「あなたは私の願いは必ず叶うと言つてくれた。だから私は私の願いを叶える。あなたはあなたの願いを叶えて。大丈夫、きっと叶うから」

少女はにこりと微笑み、僕にそう断言した。

きっと叶う、そう信じて……。

こうして、僕たちの願いを込めた箱をそつと穴の中に埋める。これを掘り出すときは、互いの願いが成就したそのときだ。願いが叶うかはわからない。それこそ神のみぞ知ることだろう。もちろん、僕は神なんてものはあまり信じていない。けれど、もし、本当に神様がいるのであれば彼女の願いだけでも叶えて欲しい、そう心から思つた。

それから半年後。僕はこの町を離れることになつた。急な事だつたせいもあり、別れの挨拶はシロとカズ、それと詩音ぐらいにしか出来なかつた。

あの日から少女の姿は見ていない。屋敷に行つても、その姿は見つけることが出来なかつた。いつもならば、窓際に立つて外の風景を眺めているのが日課だった彼女がいなくなつていた。

毎日のように屋敷の前を通り過ぎていたのだが、そのうちの一回も会うことはなかつた。ほどなくして、屋敷にいた人間は別の町に引越したことを知つた。

最初は別れの挨拶も出来なかつたことがとても悲しく思えたが、きっと彼女とはまたあの場所で会える気がした。だから、僕は自分の願いを叶え、再び彼女に会うことを心に誓つたのだ。

この町を離れる日、父親に「この町を離れる前に行きたい所はあるか?」と聞かれ僕は迷わず「海に行きたい」と答えた。

まだ、春にはまだ遠い三月、海から吹く風は冷たく、肌に痛みが走る。たかだか、十五年しか住んでいなかつたこの町だが、色々あつたと思い返す。

真っ先に浮かんだのはあの屋敷の少女の笑顔だった。あの少女は元気にしているだろうか、願いを叶えて今は元気に走り回っているのかもしれない。そんな想像をして一人で笑ってしまった。横で煙草をふかしていた父親が怪訝そうな顔で見てくる。

「どうした。何かいいことでもあったのか？」

「ううん、ただ、ちょっとね」

「なんだ、感傷に浸るにはまだ早いだろ」

「うん、僕は大丈夫。きっと……また会えるよね」

「何の話だ」

「なんでもない。それじゃ行こうか」

相変わらず父親は不思議そうな顔をしたままだが、それを気に留めず車のほうへと歩いていく。ふと、頭上に目を向ける。すると、そこには……、

「紙飛行機」

ふわり、ふわりと風に乗って紙飛行機が宙を舞っていた。その光景に僕は心から「おめでとう」と呟く。

“元気になって自由に外を歩いてみたい”

「届いたんだね、願いが」

彼女の紙飛行機は三月の御影町の空を、自由にそれこそ鳥のよう

に飛んでいた。

そして僕は彼女の願いが叶うことを信じてこの町を後にした。今度は僕の願いを叶えるために……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2331ba/>

全力少女と災難体质

2012年1月10日22時46分発行